慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小島幸治訳 近代英国社会主義史
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.1 (1923. 1) ,p.147- 151
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230101-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

123-6)（本書四四六頁ニ「十六世紀最初ノ二十年間」トアルハ明ニ誤植ナリ）オランダの侵略により一時外國貿易の衰へし時には植民地企業が之に繼いだ。Civil War以前に失敗せる事業の主たるものはFishery Society なるも、一六四〇年――六〇年の紛擾の時代にさへも或種の事業は充分の利益を收め、王政復古より名譽革命に到る間の外國貿易の膨脹期に於ては東印度會社、Hudson's Bay Company, Royal Africa Company は積立利益金拂戻によつて公稱資本を各々二倍、三倍及四倍に增加せしめた。次の二十年間外國貿易の沈滯せる間に國內產業の發達のための會社設立が一六九二――五年に盛んに行はれた。第十八世紀に入りても最初の二十年間、二三の例外を除けば殆ど總べての其當時の諸會社は利益を擧げて居た。

加之、成功せる事業の利潤頗る大なりしに對して失敗せる事業の損失は全體より見て多くないのである。又會社解散の必要なりし若干の場合に於て出資されたる資本の少くとも一部分は株主に拂戻された。假令或種の企業が全然失敗に歸せし時と雖も、社員の損失を制限すべき事情があつた。假令、Royal African Company 及 Royal Fishery Company の如きは議會を經たる法令により公稱資本額以上は損失の責任を負はざるものとせられた。しかし全べての特權會社は同樣に有利なる地位にありとなすアダム、スミスの所論（Wealth of Nation: ed. Cannan. vol II. 232）の如きは謬謬である。蓋し未拂込資本以上に株主に拂込が行はれた多くの場合があるのである。

但斯る事業は失敗せる事業中にありても例外と云ふべきものである。此時代の大多數の株式會社は漸進的發達によるものにして從て頭初より不成功なる事業は唯比較的少額の資本を得るにすぎない。從て、大にして有利なる會社の利益は、小にして失敗せる會社の損失に對して其幾分を減ずるとするも、尙投資全額に對し充分なる利益を與へ得る大なる殘高を有したのである。斯くして以上の諸事實は株式的企業への不斷にして益々增加しつゝある資本の流入を說明する。(vol. I. 446-8) かくして株式會社に參加せる資本家の利益は確證し得たるも如何なる程度にまで國家の利益と一致せるかを研究すべきである。之等の問題を廣き見地に立ちて觀察せんに、從來近世初期の株式會社の本質及結果に就ての所說は概ねアダム、スミスの所論によつて決せられて居る。從てスコットは次にアダム、スミスの株式會社論が幾何の誤謬を含むものであるかに就て批判を加へる（未完）

新刊紹介

小島幸治譯　近代英國社會主義史

大日本文明協會發行

Max Beer の History of British Socialism が社會思想經濟學說の研究者、實際勞働者運動の指導者の坐右に缺く可からざる好著であることは今新たに說くを須ゐない。Webb の勞働組合史、Held の英國社會史二篇、Ashley, Cunningham 二家の經濟史、Leslie Stephen の「十八世紀思想史」及び「英吉利功利主義者論」等の猶ほ滿たさずして殘してた缺陷は、Beer を待つて始めて塡められたのである。本書は始め獨逸語で書かれ(Die Geschichte des modernen Sozialismus in England, 1913) 著者は自ら之を其儘英譯すべしとも傳へられてゐたが、著者の篤學はそれを爲すことを以て甘んぜず、更に六七年の歲月を費し、其內容に大增補を加へて然る後始めて之

を英吉利讀書界に發表したのである。單に記載の年代範圍丈けに就て見ても、舊著が筆を十八世紀の經濟革命に起こして、千九百十二年社會黨諸派合同の企ての頃に止めてゐるのに對して新著は上は中世共產主義に遡り、下は最近の英吉利に於ける專ら勞働組合運動に中心を置く革命的諸傾向に及んでゐるのである。

今小島氏が飜譯せられたのは此全部ではなくて、近代社會主義と題する第四篇丈けであるが、併しこれが現在の英國社會思想及び社會運動を理解する爲め最も直接の必要がある部分であることは言を俟たぬ。十八世紀後半の所謂產業革命以來十九世紀中葉に至るまでは英吉利の社會的動搖不安の時代であつたが、此の動搖不安は樣々の原因に激成せられて、一八三〇年代から十餘年に亘つて治者階級の心膽を寒からしめたチャーチスト運動となつた。然るに此運動が鎭靜に歸してから英吉利勞働者運動には一轉機が來て、勞働者は「着實」「堅實」なる勞働組合協同組合運動に力を注ぎ、熟練勞働者の物質的境遇は大に改善せられたが、併し一方其精神生活の水準は低下して、今日の俗語で云へば甚だしくブルジョワ化した。小島氏の飜譯した第四篇は凡そ此のあたりから說き始めて、此の「ブルジョワ化」した英吉利勞働者が如何にして漸く社會主義的に覺醒して力を勞働者階級の獨立代表運動に注ぐに至つたか、又勞働黨成立の後勞働者階級が漸く之に不滿を感じて一方には其內心の要求、一方には亞米利加佛蘭西からの影響の爲め如何に革命的新機運が勃興するに至つたかを極めて詳細に叙述して居る。其叙述を一言にして評すれば恐らく周到の二字は最もよく之に當るものであらう。たゞ著者は周到にして遺漏なからんとを欲するの餘り其叙述は稍々光彩を減じて平板煩瑣の弊に陷ることが全くないではない。此點に於て此著は例へばSombartの、繪で云へば大膽なる遠近法とも云ふべき、或部分のみに焦點を置いて他を甚しく省略する方法を用ゐた記述ほど讀者を惹着ける力は持つてゐないやうに思ふが、併し斯る大膽なる遠近法が如何に危險多きものなるかを顧みれば、固より此の「周到」を以て Beer の疵病とすることは出來ないのである。

周到なる Beer はまた評者の見る限りでは甚だ公平である。彼はそのマルクスに對する傾倒にも拘らず、事物を測るにマルクシズムの尺度を以つてすることが決して性急でない。例へばフェビヤン協會の綱領方針の如きはマルクシストの見地からすれば、もつと苛酷なる批評を下してもいゝ筈だと思はれるのに、彼れは充分理解を以てエッブ、ショウ等の事業を記載し、且つ評價しようとする忍耐を持つて居る。而して斯くして、後に下した左の批評は最も痛切に此一派の病所を指摘するものである。曰く、

「唯一點に於てのみウェッブは誤つて居るやうに思はれる。即ち彼れは社會主義の將來に於ける勞働階級の歷史的使命を充分に理解しなかつた。一方に於ては彼が精神的にミル及び新經濟學派の子孫であることゝ、他の一方に於ては英國の民主的國家構成に對する盲從的信仰とはマルクスの階級鬪爭說の含有する眞理の核心を洞見することを彼に許さなかつた。マルクスは無產階級を偶像化したものでなく、又理想化したものでもない。彼は勞働階級を在りのまゝに理解した。――けれども彼は極めて明かに一社會階級の物質的利益、必要及び努力が社會一般的發展と步調を一にする時には、進步の有力なる槓杆（進步を早める動力）であると云ふことを知つた。獨立せる勞働階級の政治運動及び社會主義勞働政策の承認され得るのは此見地よりしてであつて、斷じて他の見地よりして然るものではない。（一五〇頁）」

此種の穩當にして適切なる批評は此外にも數多く見出すことが出來るのである。

譯者小島氏は原著及び原著者に對する充分の敬意を以て飜譯の筆を執つてゐる。氏は曾に原文の字句に忠實なるのみならず、序文の中に原著者の人物業績を紹介し、更に十四頁に亘つて原書にはない全篇の梗概を揭げて讀者の理解を助けようと努めて居るが如きは偶々氏が如何に仕事の爲めに勞を吝しまぬ人であるかを示すものである。三百頁を超える譯文の中には稍々流暢を缺くかと思はれる節がないではない。併し評者は屢々原譯兩文を對校して見たが、もつと

老練の人ならば、もつと分かり易く飜譯したかも知れぬと云ひ得る個處はあつても、まだ明かに原文の意味を謬り傳へて居ると云ひ得る個處には出逢つて居ないのである。（評者は Beer の英文が意外に讀むに易く譯するに難いものであることを此對校に由つて發見した。）たゞ些か失妥當不正確と思はれる譯語には二三心着いたのがある。例へばマルクスの資本主義進化に關する學說を紹介して、資本論の一節を引用した中に有名な「……資本主義的私有財產の死の鐘は鳴響く。酷使者が酷使されるのだ」（二九頁）と云ふ一節があるが、茲に謂ふ酷使者及び酷使の原語は Expropriateur 及び expropriert で評者は何時の頃よりか剝奪と云ふ文字を之に充てゝ居るが、高畠山川諸氏の間には既に收奪の定譯語がある。これは嘗て他人の財產を奪つた資本家が、今度は自分が其財產を奪はれるの意味であるから、酷使では當らない。定譯語を踏襲するの容易にして且つ無難なるには如かぬのである。又細かい事を云へば前に引用したエッブ批評の文言の中に「英國の民主的國家構成に對する盲從的信仰」と云ふ句があつたが、此所謂盲從の原語は implicit であるから、寧ろ不言裡の信仰又は暗默裡の信仰と云ふ程の意味ではないかと思ふ。併し斯ういふ風にして洗立てれば如何なる老大家の譯文中にも誤謬ある事は免れ得ない。右の如き指摘は決して本書全體の評價を動かすものでない事は特に明記して置き度いのである。右の外に固有名詞の發音に不正確と思はれるものがあるのに二三心着いた。元來外國の人名地名を我國の假名で表はすのには抑も始めから無理があるので評者も屢々過ちを犯して來たが、併し猶ほリーセスター（Leicester）ポールモール（Pall Mall）ジョン・ジュール（Jaures）等には未だ改善の餘地があると思ふ。敢て斯る些事をも指摘するのは、譯者が本書を基礎として更に原著の全譯（中世の部分を除く）を公にすべきを約束して居られるからである。本書は現形の儘でも既に充分識者の歡迎に値するものであるが、全譯の速かに完成せん事の更に一層望ましいことは言を俟たぬ。小島氏の努力を祈る所以である。（小泉信三）

神田孝一著　勞働能率研究

菊判三百五十二頁
定價金三圓八十錢
神田東條書店刊行

本書の著者神田孝一氏は工場營理法に關する經驗と學識とを兼備せる斯界の第一人者である。氏は人も知る如く大藏省專賣局にありて多數の女工を使傭する煙草工場の管理實務に當り傍ら都下の諸校に於いて工場管理法の講座を擔當し、尙ほ激務の餘暇を以つて大著「實踐工場管理」並びに「日本工場法と勞働保護」の兩書を公刊せらる。前者に對しては既に世間に定評あり、縱令「國民經濟雜誌」がなしたる批評の同感すべきものなきにあらずとするも猶ほよく權威たるを失はず、後者も亦我が國現行工場法の缺點短所を研覈し、これが革新改善の術策を擧示せる好著述である。茲に紹介せんとする「勞働能率研究」はその表題の示すが如く、工場管理問題の核心たる勞働能率に關するものであつて、前者に關聯せる特殊研究の成果である。

氏の學風は既に前著に於いて略これを窺ふことが出來るのであるが、吾人はこの「勞働能率研究」の冒頭の一章に於いても、その事物を正視する忠實なる態度の一班を知ることが出來るのみならず、幾多の重要なる啓示を蒙るのである。實に科學的管理法を生みたるものは資本主義的精神である。自由競爭を原則とする現代產業界に於いて、最も多くの利潤を獲得せんがためには勢機械の使用、原料の消費、勞働の使役を合理化せんことを必要とする。この必要に應じて生れたるものが科學的管理法である。勞働は既に商品化せられてゐる。さうして勞働を更らに機械化しやうとするのが勞働能率問題であ